

1月8日団会議・団委員会合同会議にて

2 団の品質の向上

今日は、藤丸副団委員長から「品質」について話をするように言われています。

大阪連盟の今年度の方針は、「品質を向上させよう」ということでしたね。覚えていますか。品質が向上したら、スカウト数が増えると説明しています。

私の言いたいことは、「品質を高めて、スカウトを増やそう」ということです。

日本中で、日本連盟、各県連盟が必死に対策を考えています。それを地区に伝え、そして団に伝えています。団は、もちろん団の現状を評価、反省し、スカウトを増やす対策を講じています。

団は独自に隊員募集するしかありません。地区は支援してくれます。上手に地区コミッショナーに相談して、団を成長させる。こういうことができる大きな組織の中にいるのです。

団の中では、当然協力しあって取り組まないといけません。

誰がやるんですか。リーダーだけ？ 保護者もいます。スカウトだっています。団内全員で協力することで大きな力が出せるんです。

先程、私の言いたいことは、「品質を高めて、スカウトを増やそう」ということです。と言いました。これで言いたいことわかりますか？

わかった人はどれだけいますか？手をあげてください。

これはねえ、わかったかわからないかはわかりません。

なぜかと言うと、みんながわかったと言ってもですねえ、その中身が同じですか。同じじゃないですね。違っていたら、バラバラだから協力し合えないですね。

だから、理解を共通にしないといけない。そのために、いまから話をしたいと思います。少しですよ。10分だけ。10分経ったら途中でやめます。いずれにしても、理解は無理です。でも、今日はきっかけづくりなんです。

■セーフ・フロム・ハーム

イギリスでは、「セーフ・フロム・ハーム」に取り組んで、登録数が増えました。この事実を考えてください。そのまま日本では成功しませんよ。参考にして日本でなにができるかを考えるんです。2団もなにをやれば同じような効果をだせるかと考えてほしいのです。

それでは、クイズです。イギリスの登録数は、つぎのどれか。

1. 「85万人」、
2. 「40万人」、
3. 「15万人」

はい、選択してください。

正解は40万人、正確には、2015年で44.4万人（HPによる）です。日本は、11.5万人（28年3月）、世界で11番目。アメリカは597万人（HPによる）。

全体で2,489万人。昨年の世界ジャンボリーでは、4,000万人という数字もありましたけどね。

イギリスで、「セーフ・フロム・ハーム」によって登録数が増えた理由が大事です。

どなたかわかりますか。はい、時間がありませんから、説明します。

ボーイスカウトが、このようなことを熱心にやっているのはすごいことだ、安心できる。すばらしい。という評価が高まったのです。大雑把にいうと、今までよりもある種の品質が向上したのです。それで社会的な評価が高まったのです。

日本はそうはいかない。しかし、「セーフ・フロム・ハーム」に力をいれています。私は、もう誓いました。ここにあります。皆さんは持っていますか。持っている人数によって、関心度合いが違いますね。

日本連盟が旗を振って、みんなでやろうと言っても、ボーイスカウト全体でやらなければ、大きな力になりません。大事なことは大きな力にすることです。そうでないと社会的に評価されません。そして、スカウトは増えません。

じゃあ、他の方法を考えますか。勝手にやりますか。私は、団委員長の立場でも個人的にも力を結集することに賛同します。

■話はどれだけ伝わる？

さて、今お話していることはどれだけ伝わっているのでしょうか。一般的には、20パーセントしか伝わりません。東京の国立劇場の文芸員の方から聞いたのです。100%伝わると思っていたらとんでもない間違いです。これは知っている方がいいですよ。私は、まあ50%伝わればいいと思っています。だって100%の説明していませんから。結果は、30パーセントの人、50パーセントの人、80パーセントの人、さまざまです。

訳のわからない話し方をした場合は、0パーセント。最初から団委員長の話は聞きたくないという人は0パーセントですね。

話を聞いて、1時間経ったら半分忘れるでしょう。物忘れが激しい人は、1分で全部忘れますね。

大事なことは、スカウトに注意するとき何%伝わっているかを考えておかないと効果を確認できないですよ。

「走ったらだめだよ。やめなさい」

と言った。スカウトはそれでも走る。これはどういうことでしょうか。考えてください。

理解力は、知識、情報の共有度合いで差が生じます。知らないことがあると理解できない、つまり伝わらないのです。だから、分かりやすいところから、順番に説明しないといけない。

今回は話す内容を紙でお渡しし、目と耳で確認していただくことにしました。

■ どうやって理解力を高めればいいのか

話は20%しか伝わらないです。でも、徐々に増えてきます。これに期待しましょう。

団内で話を理解しやすくし、自分で考えやすい状況にすることを目指しています。

- ・難しい話もある。
- ・話が長い場合もある。
- ・短くてわからない場合もある。
- ・専門的な話もある。
- ・今は、自分に関係ない話もある。
- ・我が子と関係ない話もある。
- ・聞きたくない話もある。

わからなければ、聞き流したらいい、読み流したらいい。

わからないときに聞き正したくなってくれれば、うれしいです。

わからないときに、2回読んで理解する気になってくれたら、なおうれしいです。

全体的に、1年前に比べて、話がよくわかるようになったと感じてくれたらうれしい。

団メールを始めてから何か変化はありませんか。保護者の関心が高まっていますか。指導者の知識が増えていませんか。自分自身を考えてみてください。効果があるのなら、私だけでなく、みんなでやりませんか。どこの隊のことを一番よく知っていますか。さっぱりわからない隊はありませんか。

何のための団メールを使うのでしょうか。2団全員に伝えることができる。伝えたいことが2団全体に伝わるのです。団は、少しずつ、成長していると思いますよ。

実際に品質が向上していることを共有しましょう。情報発信に期待するのです。団と隊からの情報発信に力を結集させるのです。もっと良くなります。足並みをそろえないといけないです。協調性というやつです。少しずつです。少しずつ良くなるのを期待しています。だって、私の言いたいことが20%しか伝わっていないです。20%しか有効性が理解されていないです。そういう理解をすれば、効果がすぐ出なくても納得できます。

■ たとえばBVS隊からの発信

白崎隊長はよくやってくれました。隊集会の報告を団メールで出してくれました。私が書いていると思っている人がいるでしょう。「あんなもの見るものか」と私を嫌っている人は思っているでしょうね。実際は、白崎隊長が考えて報告書を作成していますよ。それをビーバー隊リーダー全員に送っています。全員が見ているのです。それに修正が入ります。

私の場合は、隊長が書いた文面の言い回しだけを修正します。内容を追加することはありません。リーダーたちが集会が終わってからよかったことについて、これは報告に入れたらいいねという意見を先に隊長に伝える場合があります。

ビーバー隊の保護者には、評判がいいと思います。保護者の理解が深くなっていることを実感しています。品質が少しずつ良くなっているということです。

■たとえば、BVS隊の品質目標

ビーバー隊の品質目標の中に、

- ・「計画書どおりに活動しよう。とりわけ、初めと終わりの時間を守ろう」
- ・「実施可能な計画書を作ろう」

というものがあります。

私と白崎隊長は、品質の相談をしていたときに、「どうして計画書の時間を守らないといけないのかな。別に少しぐらい遅れてもいいやん。どうして？」

と言う話を深く検討したことがありました。

白崎隊長が言います。

「団委員長、だって、スカウトに時間を守ろうねって言うでしょう」

「そうだね。いつも言っているね」

「だから、リーダーも守らないといけないということです」

「なるほど、でもなんか根拠に乏しいね」

「簡単なことですよ」

「なんで？」

「スカウトに時間を守ろうと言ったときに、スカウトから、『団委員長、団委員長だって時間を守っていないじゃない。なんでスカウトだけ時間を守るの？』って聞かれたら、団委員長はどう説明しますか？」

「これは1本取られました」

「リーダーはスカウトの見本にならないといけないんです」

「じゃあ、スカウトの品質の前にリーダーの品質向上が先だな」

「ビーバー隊の品質目標は、リーダーのためです」

「確かにあの品質目標はスカウトのためではなく、リーダーのことだった。そうか。それで、その先は？」

「その結果、保護者やスカウトの品質があがるのです」

「なんか飛躍している。わからない」

「リーダーが見本を示すのです。よい習慣を続けることが大切です。団委員長が言っていることです」

「そうか。私の団メールをよく勉強しているね」

■サッカーやラグビーの選手は自分で考えてプレーをする

次は、自分で考えること。

なでしこジャパンが優勝しました。すばらしい感動をもらいました。

あの、佐々木則夫監督の話をテレビで見ました。

なでしこジャパンは、優勝する前は、4位だったです。

このとき、監督やコーチはどうか。7割を監督、コーチが選手に指導した。しかし、この先優勝するには、選手が自分で考えてプレーができるようにしないといけない。

ということかわかりますか。

神戸製鋼ラグビー部スティーラーズの平尾監督に15年前からずっと聞いていました。

監督は、試合が始まると何もできない。声はピッチの選手に届かない。だから、選手は自分自身で考えて行動しないとイケない。自分で判断できる選手を育てないとイケない。

自分が選手の時自分だから実現できた。しかし平尾選手が監督になってからは優勝していないんじゃないかな。

なでしこジャパンの選手は、佐々木監督のこのような方針変更で成功したのです。

どこの組織、グループでも同じです。

ボーイスカウトの活動は、スカウトの自主性を育てています。これは、リーダーも同様です。大阪連盟、ほくせつ地区、団の方針に基づいて、全体の力を大きくする活動を自主的に行えれば、強い団になります。

■イチローはなぜ偉業を達成したか

つぎはイチローの話。イチローは毎朝カレーを食べていたそうです。誰でも朝カレーを食べれば上手になる。そんなことはないわな。

イチローのどこに着目したら、ボーイスカウトに役立つ話に結び付くのでしょうか。

品質は、いつも高いことを維持し続けることが証明されて、多くの人に評価されますね。たとえば、「あの人は約束の時間に遅れたことがない」これは、一人が思うのではなく、多くの人が共通に評価していることですね。いつでもどこでも同じなんです。

イチローは、実績が積み重なって大きな成果をあげました。

でも、私が目にできる姿は、イチローがウエイティングサークルにいるときにいつも同じ柔軟体操をしている。いつも同じですよ。そして打席で右腕でバットをピッチャーに向ける。失礼なポーズと言われましたが、やり続けました。毎朝カレーを食べるのも同じ意識かもしれないと推察します。

一日中、一年中規則正しい生活をしていることが想像できます。「早起きは三文の徳」、「毎朝5時に起きる生活を続けていたら、すこぶる体調がよくなった。早起きは三文の徳というがそれ以上の徳を得た気分だよ」という使用事例がネットにありました。

つまり良い習慣を続けるといい結果につながるということです。

これをボーイスカウトの教育に応用してはどうか。各指導者が考えることです。よい習慣がポイントです。よいことをしないとイケない。続けることもポイント。「継続は力なり」と言っています。これは、なんとなくわかる。経験的には理解できる。でも説明できますか。

私が、大学院の学生に教えてもらったこと。

「良い習慣を続けることによって前頭葉が鍛えられます。前頭葉が鍛えられると集中力が強くなります。それによって、練習や勉強が効果的にできるようになります。これで差が出てきます」

こう考えるとなるほどだと思います。だから、隊集会の活動の様々な場面で良い習慣を続ける体験をすることが教育効果につながり、人間力を高める結果になります

■2団の中で情報を共有すると

私は、指導者と保護者が持っている情報量の差を縮めたいと考えています。情報の背景を近づけるのです。2団に関する知識、情報、ノウハウを誰もが共通に持てるようにしたい。今はわからなくても縮めていきたい。そういう活動の一貫として団メールからの情報発信を利用しようと考えています。一人ではできません。そのうち多くの人が利用して情報を発信してくれるでしょう。

そして、私の考えでは、品質が上がれば、教育効果が発揮できるのでスカウトが成長する。このことを体験者に伝えたら、ボーイスカウトに入りたくなる。というものです。

品質とは、規則正しい生活や活動ができることです。

- ・制服を正しく着用する。身だしなみを気にする。
- ・セレモニーをいつも正しく行う。これを気持ちがいいと感じる。
- ・計画書を正確に実施する。時間を守る。
- ・実施可能な計画書を作成する。作成能力を高める。
- ・安全第一優先の計画とする。危機管理意識を高める。
- ・楽しく計画と実施を行う。きめ細かく実施計画を立てる。

まだまたいくらでもあります。

これらの良い習慣を積み重ねることが、スカウトの生活を改善していく力になることも品質が必要だと思ふ気持ちを強く持ってほしいです。

以下は、事実をモデルにした創作です。

岡町駅を時間通りに出発して、私たちは山本駅に向かっている。

満願寺から石切山の親子ハイク、帰りも時間通りに戻ろうと思った。

山本からスタート。私のグループは先頭を歩いたが、時間遅れが気になった。

満願寺の本堂で3グループが集合して、一緒に出発の予定。30分近く遅れている。最後尾は見えない。

担当の某隊長に、2グループは先に出発しようとしてアドバイスした。なかなか藤丸実行委員長に連絡しない。私は、直接藤丸さんに電話した。すぐに了解が得られた。私は、長蛇の列で進めば、さらに遅れることを避けたかった。

さわやか広場の活動時間は縮小された。

石切山から雲雀丘花屋敷までは、順調に歩き、少し早めに到着した。

吉田さん用に確認した市街地のルートは、切符購入班の絶好の先回りルートになり、阪田さんが切符を持って待ち受けていた。スムーズにホームへ入った。先頭が一番後ろまで歩く。トイレに行って遅れる人。各グループは収拾がつかない。確認を急がせた。横のホームに始発の普通が空状態で停車している。「これに乗ったら楽だな」と思った。藤丸さんは忙しくホームを歩いていた。

力が抜けた状態で「藤丸さん、普通に乗らないの？」と聞いた。

キリッとした顔で、「急行に乗ることになっています！」と返事があった。

私の顔に緊張感が戻っていた。「ごめん。わかった」

全員が各ドアに別れて乗車した。

ビッグビーバーに話しかけた。

「時間通りに帰れてよかったね」

「べつにどっちでもいいよ」

「そうかな」

「ちょっとしか変わらないでしょ」

「ちょっとでも遅れたら遅刻でしょ」

「そうだけど、困らないよ」

「時間通りは気持ちがいいでしょ」

「そうだね」

「遅刻と言われないよ。みんなが気持ちよく帰れるよ」

「うん。気持ちいいね」

「よかった」

岡町駅に到着して、藤丸さんをねぎらった。満足そうな笑顔が返ってきた。

団委員会の誇りとなる運営ができた親子ハイクは、こんなことがあったのです。各隊はどんな印象を持っただろうか。団委員会は、常に隊の模範として活動をする気持ちを持っています。